

# 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ (三)

田中司郎

## はじめに

平成元年六月から七月にかけて、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の翻刻作業を行う過程で三百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合が出てきた。この「書き入れ」や「ミセケチ」等を『宮崎女子短期大学紀要』第二十七号「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集の書き入れ』(一)」では、二〇才の途中まで、第二十八号「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ」(二)では、三七ウまで考察した。今回、(三)は、三八才から六九ウまで考察する。

○そゝろきくさなりしをついててま〇としく申わたりしかとよのつねのありさまはすへてあらしとのみおもひしかは心つよくてすきしをこのおもひのほるなることをはやいとようきけりさて  
(一三九 詞書)

「ま」と「と」の間の右横に太字「こ」の挿入が見られる。作者と藤原隆信との関係はかりそめのものであったが、隆信は文のやりとりを機会として、作者に「真実らしく」言い続けてきた。今山八幡宮所蔵本と九州大学本は「まとしく」である。書(宮内庁書陵部所蔵本)、無(無窮会神習文庫所蔵本)、彰(彰考館所蔵本)、吉

(吉水神社所蔵本)内(内閣文庫所蔵本)、刊(寛永刊本)、竹(竹柏園旧蔵本)、架(架蔵甲本)、群(群書類従所収本)は「まことしく」であり、前後の意味は円滑に理解できる。なお、以下写本名は〇〇本と略記する。

「おもひのほる」の「る」の右横に小さな「か」の書き入れがある。この部分の意味は、「思いがけないこと」であるからあきらかに誤写と見て書き入れたと思われる。「のの」は今山本に見られ、抛り所は見当たらない。

三八ウ

○あはれのみふかくかくへき我おゝきてたれに心をかはすなるらん  
(二四一 歌)

『下官集』に「こゑを 名を 人をもよをして」がある。「おゝ」に、二点のミセケチを施している。「ゝき」の「ゝ」にミセケチを施し、「ゝ」の右横に小さく平仮名「を」記入する用例は、二二二の歌(一)で考察した。なお、書無彰内竹架群本は「我をゝきて」、吉刊本は「われををきて」であり、「我おゝきて」は、今山本と九大本に見られる。『和字正濫鈔卷三』に「置 おく 日本紀萬葉和名。をくと書くへからず」とある。

三九才

○まつりの日をなし人(一四三 詞書)

「を」に二点のミセケチを施し、「を」の右横に平仮名「お」を小さく書き入れている。同例について、六の詞書(二)で取り上げた。書無彰吉内刊竹架群本は「おなし人」であり、「をなし」は今山本、九大本に見られる。

三九ウ

○こえぬれはくやしかりけるあふさかをなにゆえにかはふみはしめ

けん(一四五 歌)

「え」に、二点のミセケチを施して、「え」の右横に平仮名で「へ」を記入している。八九の歌(二)「君ゆえは」で考察した。書彰吉内刊竹架群本は「なにゆへ」、架本は「何ゆへ」で今山本と九大本は「なにゆえ」である。『和字正濫鈔卷四』に「故 ゆゑ 萬葉におほし。古事記にもあり。ゆへとかくは誤來れるなり。改むへし」とある。

四〇オ

○心にも袖にもとまるうつり香をまくらにのみやちきりおくへき  
(二四七 歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を平仮名で小さく書き入れている。同じ用例が、二二の歌に「とゝめおきて」とあり、考察した。書無彰吉内刊竹架群本は「をく」、今山本と九大本は「おく」である。

○をなし比よとこにてほとゝきすをきゝたりしにひとりねさめに又かはらぬこゑにてすきしをそのつとめて(一四八 詞書)

「を」に、二点のミセケチを鮮明に施し、「を」の右横に「お」を平仮名で記入している。六の詞書(二)一四三で取り上げた。書本は「おなしころ」、無彰本は「おなし比」吉内刊竹架群本は「おなし」である。今山本と九大本は「をなし」である。『和字正濫鈔

卷三・五』に「同 おなし」とある。

四〇ウ

○またしらしおとせてふみのこまこまくとありしかへしになとや

らん(二五〇 詞書) (第一五〇番詞書「みたれて……」から

第一五三番の歌上句「……心のほとは夜をかさね」(一葉分)料

紙欠損)

「ら」「お」にそれぞれ二点のミセケチを施し、「ら」の右横に

太字で「ハ」、「お」の右横に「を」と大きな文字で書き入れている。

「ら」の右横の「は」は意味の上で誤写と見て訂正したと思われる。

「おと」については二五の歌で考察した。無書彰刊竹架群本は「を

とせて」、内本は「音せて」、「おとせて」は今山本と九大本に見ら

れる。『和字正濫鈔卷三』に「音 おと 萬葉におほし。をとゝ書

へからず」とある。

四一ウ

○せんなきことをのみおもふころいかてかかゝらすもかなとおもへ

とかひなきこゝろうへて(一五六 詞書)

「へ」に、二点のミセケチを施し、「へ」の右横に「く」を書き入れている。「かひなきこゝろうくて」は、「かひがない、それがな

さげなくて」の意であるから訂正したと思われる。

四二オ

○ちゝおとゝの御供に熊野へまいるときゝしをかへりてもしりをと

なければ(二五八 詞書)

「り」に、二点のミセケチを施し、「り」の右横に「はし」と小さく平仮名で書き入れている。書き入れの箇所は、「帰京してもしばらく何とも言つて来ないので」の意であり誤写と見て書き入れたと思われる。

○とおもふもいと人わろしひとせなにはのかたより帰てはやかて  
おとつれたり物をなとおほえて（一五九 詞書）

おきつなみかへれはおとはせし物をいかなる袖のうらによるら  
ん（一五九 歌）

「おとつれ」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に、平仮名で「を」を書き入れている。「おとつれ」については、六七の詞書（一）で考察した。書無彰吉内刊竹架群本は「をとつれ」、今山本と九大本は「おとつれ」である。

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。「おと」については、二五の歌（一）で考察した。書無彰吉刊竹架群本は「をと」、内本は「音」、『和字正濫鈔卷三』に「音 おと 萬葉におほし。をと書へからず」とある。今山本と九大本は「おと」である。

四三才

○雲のうへもかけはなれそのちもなをときくおとつれし人をた  
のむとしはなれとさすかに（一六二 詞書）

「おとつれ」の「お」に、五点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。六七の詞書（一）、一五九の歌で考察した。無彰吉刊竹架本は「をとつれし」、群本は「音伝し」、今山本と九大本は「おとつれ」である。

四三ウ

○いかならん世までもたゆむましき（一六二 詞書）

「たゆむ」の「む」の左に、二点のミセケチがあるが、書き入れはない。九大本も「たゆむ」である。書無内刊竹架群本は「たゆましき」である。意味に異同が見られる。

○なかれてたのめしこともみつつきのかきたえぬへきあとのかなし

さ（一六二 歌）

「ことも」の「こと」に一線のミセケチがあり、「こと」の右横に「かい」の書き入れがある。「生きている限りとあの人を頼みに思わせたことも」の意の箇所である。書き入れの方は意味の理解に苦しむ。書彰吉内刊竹架群本は「たのめしかとも」である。

四四才

○雲のうへをよそになりにしうき身にはふきかふかせのおともきこ  
えず（一六三 歌）

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。二五・一五九の歌のところで考察した。書無彰吉刊本は「をと」、内竹架群本は「音」、今山本、九大本は「おと」、書無彰吉刊本は「をと」である。

○治承などの比なりにやとよのあかりの比上西門院女坊物見に子  
くるまはかりにてまいられたりし（一六四 詞書）

「女坊」の「坊」に、ミセケチを施し、「坊」の右横に「房」を記入し、訂正している。「子くるま」のそれぞれに、二点のミセケチを施し、「子くる」の右横に「二車」と書き入れている。この箇所は「女房たちが見物に牛車二輛ばかりで内裏へ参上された」という意の箇所と考えられる。書無吉内刊竹架群本は「女房」、今山本と九大本は「女坊」である。書無刊本は「二車はかり」、吉内本は「くるま二はかり」、竹架群本は「車二はかり」である。写本異同が多い。

四五才

○など申しおりはたゝあたことゝこそおもひしをそれゆへそこのも  
くつとまてなりしを

あわれのためしなさはよそにてなけしし人におられなましかはさ

はあらさらまし返くためしなかりける契のふかさもいはんかた  
なし大方の身のやうもつくかたなきにそへて心の中もいつとなく  
物のみかなしくてなかくめし比秋にもやゝなりぬ風のおとはさらぬ  
たに身にしむにたとえんかたなくなめられて(一六六 詞書)  
「あわれ」の「わ」に、二点のミセケチを施し、「ハ」を書き入  
れているが、同じ詞書の終わりに「物のみあはれなり」とあり、複  
数の人物の関わりが考えられる。

「あわれ」の「わ」に「は」を書き入れた用例考察は七〇の詞書  
(二)で取り上げた。「ためしなき」の「な」の右横に「とイ」を書  
き入れている。九大本、書吉内竹架群本も「ためしなき」、刊本の  
み「ためしと」である。

「おと」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に  
「を」を書き入れている。「おと」の書き入れについては、二五、一  
五九、一六三の歌の考察で述べた。

「たとえ」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に  
「へ」を書き入れている。『下官集』に「たとへ」、『仮名文字遣』に  
「たとへ 譬 喩 興 縦」、『和字正濫鈔卷四』の「譬 たとへ  
たとふを躰にいへり。假名にはたとひとといへり。假使をたとひと  
いふに、たとへも意同し。よりてたとひとをたとへばともいへり。」  
とある。今山本と九大本の「たとえ」表記のより所は見当たらない。  
四五ウ

○にしやまなる所にすみし比身のいとまなきにことつけてやひさし  
くおともせすかかれたる花のありしにふと(一六七 詞書)

「おと」の「お」に、六点のミセケチを施し、「お」の右横に  
「を」を記入している。「おと」の書き入れについては、二五、一五  
九、一六三の歌の考察で述べた。

「も」の右横に「無イ」の書き入れがある。「ひさしくおともせ  
す」は「長い間たずねて来なかった」の意であるが、写本異同が  
なりある。書影内本は「をとつれす」、架本は「おとつれす」、竹本  
は「音つれす」であり、今山本と九大本は「おともせす」である。  
四六オ

○山さとはたまゝくすのうら見えてこさゝかはらに秋のはつかせ  
(二六九 歌)

「見えて」の右横に、やや小さく「にイ」「むれハイ」の二つの  
書き入れが見られる。刊架群本は「うらみにて」で、書き入れの一  
つと一致する。「うらむれは」の写本は見当たらない。影内本は  
「うらみえて」、書無吉本は「うら見えて」で写本異同がかなりある。  
九大本は「うら見へて」である。『下官集』は「見え」で、九大本  
の「見へ」の拠り所は見当たらない。  
四六ウ

○はるよりさきにしためくみたるわか葉のろくしやう色なるかとき  
くみえたるに露は秋思ひいでられておきわたりたり  
(一七一 詞書)

「おき」の「お」に、二点のミセケチを施し、平仮名で小さく  
「お」の右横に「を」を記入している。「おき」の書き入れについて  
は二二の歌(二)で考察した。複合動詞で、「おき」が語頭の場合、  
「おきわたり」(二七一 詞書)、「おきそふ」(二七六歌)、「おきなを  
し」(三五五 詞書)、「おき」が後の場合、「ととめおき」(二二歌、  
二四一歌)、「たのめおき」(二九歌)、「いひおき」(二〇〇 詞書)、「か  
きおく」(六九歌)、「なさけおく」(二〇〇歌)、「うつしおく」(二  
二七歌)があり、「おき」の語頭例は、集中三例である。  
四七ウ

○宮にさふらひしまさよりの中納言の女輔とのといひおかしくにくからぬさまにてなに事も申かほしなとせしか(一七四 詞書)

「かほ」を「一線」で消し、「かほ」の右横に「かは」を書き入れている。「なに事も申かほなとせしか」は「何でも言いかはしなどしていたが」の意であり、誤写と見て訂正したと考えられる。

○いとしく露やおきそふかきくらし雨ふるころの秋のやまさと(二七六 歌)

「おきそふ」の「お」に、四点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。「おき」が語頭の複合動詞については一七一の詞書で考察した。書無彰刊群本は「をきそふ」である。『和字正濫鈔卷三』「置 おく 日本紀萬葉和名。をくと書へからず」とある。『仮名文字遣』に「をく露」「うへをく」の語例があるが、今山本、九大本の「おき」の拠り所は見当たらない。

四八才

○うらやましほたき標木りくへいかはかりみゆわかすらむあきのやまさと(一七七 歌)

「ほたき」の右横に、漢字で「楳木」を書き入れている。書彰本は「ほた木きりくへ」、吉内刊竹架群本は「ほたきりくへて」であり、漢字書き入れ「楳木」の拠り所は見当たらない。「楳木」は、たき木のことである。

四九才

○さきたる花をおりてゆかりある人のつかさめしになけくことありしかいひおこせたりし(一八四 詞書)

「いひおこせ」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。「おこせ」については、八四の詞書(二)で考察した。すなわち、本文「おこせ」は、『仮名文字遣』

『和字正濫鈔卷三』と一致し、書き入れは、定家仮名文字遣いと一致することを述べた。今山本と九大本は「おこせ」、書無刊群本は「をこせ」である。

○霜かれのしたえにさけるきくみれは我ゆくすゑもたのもしきかな(一八四 歌)

「したえ」の「え」に、二点のミセケチを施し、大きな平仮名で「え」を書き入れている。確認のつもりで「え」を書き入れたと思われる。

内竹架群本は漢字で「下枝」、刊本は「した葉」である。「霜かれのしたえにさける菊」は、霜枯れの下枝にまじって咲いている菊で、この歌は、秋の司召の除目を詠んでいる

四九ウ

○上らうたちてちかくさふらひし人のとりわき中よきやうなりしにわか物申人のこのかみなりしは御ゆかりのうへにやかてみや人にてことにつねにかしみえし人のひて心かはしてかたみにおもひあはぬにしもあらしと見えしかと世のならひにて女かたはも物をもはしけなりしをまをほならねと心えたりしかはちとけしきしらまほしくておとこのかもとへつかはす(一八六 詞書)

「つねにかし」の「かし」の右横に「みえい」の書き入れがある。「つねにかし」の箇所は「常に言いかわしている資盛」の意で「かし」では意味が通じない。刊本は書き入れと同じ「見えし人の」で、九大本も「かし人」である。書本は「候し人」、彰本は「候ひし人」吉内本は「さふらひし人」、竹架群本は「みし人の」で写本異同の多い箇所である。「物をもはしけ」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」も右横に「お」を小さく平仮名で書き入れている。『下官集』に「おもふ」「おもひ」「おもへは」、『和字正濫鈔卷三』に

「思 おもふ」、「篤疾 おもひ日本紀」がある。行阿の『仮名文字遣』に「おもひくさ 思草」「うらおもふ 猶予 サタマラサル心也」「おもひやる 想像」「おもひおこす 思起」「おもふ 思想 念 惟 以傷」「ものおもひ 襟畏」「おもんはかる 虞 慮」等がある。

藤原定家の仮名遣実例(『仮名遣と上代語』〈仮名遣の起源についての研究〉資料)では高松宮本古今和歌集「於もふ(思) 六例」「於もひ 二六例」「於もは 二七例」「於もへ 二三例」、高松宮本後撰和歌集「於もふ(思) 三例」「於もひ 七例」「於もは 三三例」「於もへ 二二例」、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「於もふ(思) 一〇例」「於もは 一三例」「於もひ 一七例」「於もへ 一一例」「於もほえ 四例」、御物本更級日記(定家自筆本)「於もふ(思は・ひ・ふ・へ) 二七例」、前田家本定頼集(定家自筆本)「於もふ(思) 四例」「於もひ一例」「於もは 四例」「於もほえ 一例」「於もへ 八例」である。今山本、九大本の「をもしけ」の拠り所は見当たらない。

「まをならねと」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「ほ」を平仮名で小さく書き入れている。『仮名文字遣』に「まほにも人に 真帆人 うるはしき心也」とある。今山本と九大本は「まを」であるが、無内本は「まほ」である。一九二の詞書に「まほ(にも)」があり、表記は二通りある。「かとへつかはす」の「か」に、二点のミセケチを施し、「も」を書き入れている。「かとへつかはす」の意味は「くのもとへ送る」である。書無彰吉内刊竹架群本は「もとへ」である。誤写とみて書き入れたと考えられる。○わかおもひ人のこゝろをおしはかりなにとさまくきみなけくら

む(一八九 歌)

「おしはかり」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。なお、書き入れの文字に大小が見られるので複数の人物がかかわっていると思う。今山本と九大本は「おしはかり」である。拠り所は見当たらない。

書無彰吉刊竹架群本は、書き入れと同じ「をしはかり」である。定家自筆本である「御物本更級日記」に「をしはかり(を押しはかり)がある。また、『仮名文字遣』に、書き入れと同じ「をしはかり 推量」がある。

五〇才

○官まうのほらせ給御ともしてかへりたる人々物かたりせしほとに(一九二 詞書)

「せしほとに」の「せし」に、それぞれ二点のミセケチを施し、「せし」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと思われる。五一才

○おもひくにしたむせふことはまほにもいひやらぬしも我心にもしられつゝあわれにそおほえ給し(一九二 詞書)

「あわれに」の「わ」に、二点のミセケチを施し、「ハ」を書き入れている。九大本、書本は「あはれにも」である。「あわれ」は、七〇の詞書(一)で考察した。

「おほえ給し」の「給」に、六点のミセケチを施し、「てイ」を書き入れている。「あわれにも」は、作者の「興味深く感じられた」心境を述べて箇所で尊敬語は不要である。

○おもふとち夜半のうつみ火かきをこしやみのうつゝにまとあを○する(一九二 歌)

「をこし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「お」を書き入れている。同例が、二一〇の詞書にある。今山本と九大本は「をこ

し」であるが、書無彰内刊竹架群本は、書き入れと同じ「おこし」である。藤原定家の仮名遣い実例が高松宮本古今和歌集に「於こし(起)一例」、定家自筆本である前田家本定頼集に「於こし(起)一例」が見られる。「まとぬを○する」の「○」の右横に「そ」の書き入れがある。脱落とみて「そ」を書き入れたと考えられる。

「する」は連体形であるから係り結びの面からも挿入が必要である。五一ウ

○などおもひつゝくるほどに宮のすけのうちの御かたの番に候ける(さぶらひイ)とていりきてれいのあたこともまとしき事もさま／＼おかしきやうにいひて我も人もなのめならずわらひつゝはてはおそろしき物かたりともしておとされしかは(一九四 詞書)

「候ける」の「候」の右横に「さぶらひイ」の書き入れが見られる。書刊竹架群本は、書き入れと同じ「さぶらひける」である。内本は「にける」、今山本と九大本は「候ける」である。なお「候」のくずしに配慮して書き入れたと考えるならば書き入れは、初学者を意識していることになる。

「おとされしか」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。無竹架群本は、書き入れと同じ「をとされ」である。『仮名文字遣』に書き入れと同じ「をとす 威」がある。『和字正濫鈔卷三』には「怖 おどす」がある。

五一オ

○此人もよしなしことをいひて草のゆかりをなにかおもひはなつたゝをなし事とおもへと(一九六 詞書)

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。「をなし」については、六、五七、八七、一四三の詞書で考察した。今山本と九大本は「をなし」であるが、

書無彰吉内刊竹架群本は書き入れと同じ「おなし」である。五二ウ

○わすれしの契たかはぬ世なりせはたのみやせまし君かひとこと(一九七 歌)

「契たかはぬ」の「か」の右横に、小さく平仮名で「か」を書き入れている。「か」の字体を確認するつもりで書き入れたと思われる。内本は「契にかはぬ」、今山本と九大本は「契たかはぬ」である。

○いつもをなしことをのみ返々おもひてあはれくわか心に物わすれはやとつねはおもふかかひなければ(一九八 詞書)

「をなしこと」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を小さく平仮名で記入している。「をなし」については六の詞書(二)、五七、八七、一九六の詞書で考察した。今山本と九大本は「いつもをなし」であるが、書本は「いづれもおなし」、無彰吉内本は「いつもおなし」、刊竹架群本は「いへはおなし」で「をなし」の拠り所は見当たらない。

五三オ

○さることのありしかとたにおもはしをおもひけてともけたれさりけり(一九八 歌)

「おもはしを」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「とイ」を小さく平仮名で記入している。今山本と九大本は「おもはしを」であるが、書吉内刊竹架群本は、書き入れと同じ「おもはしと」である。「おもはしを」では前後の意味のつながりが不自然で書き入れたと考えられる。

○なにとなきことを我も人もいひしをりおもはぬ物のいひはつしをしてそれをよくいはれしも後におもへは(一九九 詞書)

「をり」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に平仮名で小さく書き入れている。「をり(時)」は、一、四、六、一一五の詞書、一一六の歌で考察した。今山本と九大本は「をり」であるが、書内竹架群本は「おり」である。なお、『和字正濫鈔卷三』に「時節 折節とも借て書に、折の假名をりなり」とある。

「よく」の右横に、「とかくイ」と書き入れている。今山本と九大本は「よく」だが、書影吉内刊竹架群本は「とかく」である。「とかく」表記の写本を見て書き入れたと考えられる。

## 五三ウ

○母なる人のさまかへてうせにしかことに心さしふかくて人にもいひおきをなとせられし五月のはしめなくなりしのはよるつおもふはかりなくてあかしくらしに四十九日にもなりてきられ〇し衣けさなとよりいてこもり僧にとらせあせう上人にたてまつりなとせしせにきぬのしわはまてもきたりしおりにかはらておもかけ

## (二〇〇 詞書)

「いひおき」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」書き入れている。今山本と九大本は「いひおき」だが、書無吉内刊竹架群本は、書き入れと同じ「いひをき」である。「おき」の書き入れ「をき」については、一二二の歌(一)で考察した。なお、複合動詞の語例は、集中、次の通りである。「ととめおき」(二二二歌・二四一歌)、「たのめおき」(二一九歌)、「おきわたり」(二七一詞書)、「いひおき」(二〇〇詞書)、「かきおく」(六三三歌)、「うつしおく」(二二七歌)の七例である。

「四十九日にもなりてきられ〇し衣けさ」の「〇」の右横に「たり」を小さく書き入れている。九大本も書き入れと同じ「きられたりし」で今山本の拠り所は見当たらない。

「たてまつりなどせし」の「せ」に、二点のミセケチを施し、「せ」の右横に小さく平仮名で「せ」を書き入れている。確認の意図で書き入れたと考える。

「きぬのしわまでも」の「わ」を「一線」で消し、「わ」の右横に「ハ」を片仮名で書き入れている。書無吉内刊竹架群本は「きぬのしは」、彰本は「ころものしは」であり、書き入れと同じである。今山本と九大本は「しわ」である。

## 五四ウ

○高倉院かくれさせおはしましぬとききしころみなれことし世の事かすかすにおほえておよはぬ御事なからもかきりことしかなしくな事もけにすゑの世にあまりたる御事にやと人の中甲にも

## (二〇二 詞書)

「みなれことし」の「ことし」に「一線」を施し、「ことし」の右横に「まいらせしイ」左横に「ことし」を書き入れている。この状況から書き入れに複数の人物が関わっていたと考えられる。書内吉竹群本は書き入れと同じ「参らせし」、架本は「まひらせし」、九大本も「参せし」で今山本の「ことし」の拠り所は見当たらない。書き入れの箇所は、作者が「高倉院を見慣れ申しあげていた時の事」を述べたくだりである。

「人の中にも」の「中」に、二点のミセケチを施し、「申」を書き入れている。詞書に文末で「人の中にも」では詞書の職能を果たせない。「中にも」の写本は見当たらない。

○中宮の御心のうちをしはかりまいらせしことにかはかりかとかなし

## (二〇三 詞書)

「ことに」の右横に「まいらせイ」を書き入れている。書本は「まいらせて」、彰吉内刊竹架群本は「まいらする」、架本は「まひら



する」九大本は「参せて」と謙讓語で表記され、今山本の「ことに」の抛り所は見当たらない。書き入れの前後は作者が「中宮のお心のうちを、お察し申し上げる」くだりである。

五六才

○す永元曆などの比(二〇四 詞書)

「す」に、二点のミセケチを施し、「寿」を書き入れている。これより下巻である。源平の争乱、平家の滅亡などのあつた頃である。平家の都落ちは一八三年(寿永二年)七月二十五日である。

○又ありしよりけにしのひなとしておのつからとかくためらひてそ物いひなとせしをりくもたおほかたの(二〇四 詞書)

「おのつから」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。今山本と九大本は「おのつから」であるが、書無彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「をのつから」である。集中二例(四三歌、二〇四歌)ある「おのつから」の「お」については、四三の歌で定家仮名遣いによるものであることを考察した。『和字正濫鈔卷三』に「自 おのつから おのれつからならば准己」とあり、今山本の仮名と一致する。『仮名文字遣』は「をのつから 自」であり、書き入れと一致する。

「をりく」(時々)の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を小さく平仮名で書き入れている。書無竹架群本は「おりく」、刊は「折く」であり、書き入れと一致する。『和字正濫鈔卷三』に「時節 をりふし」とあり、今山本と一致、『仮名文字遣』には「おりふし 境節 折節」とあり、書き入れと一致する。

五六ウ

○すへては今心むかしの身とおもはし(二〇四 詞書)

「今は」の「は」に、二点のミセケチを施しているが、「は」の右横に書き入れはない。九大本も「すへて今は」であり、今山本ミセケチの抛り所は見当たらない。

五七才

○人のもとへさてもなといひてふみやることなともいつくの浦よりもせしとおもひとりたる身とおもひ〇たるをなをさりにてきこえぬなとなおほしそよつたゝいまより身をかへたる身と思ひなりぬるをなをとすればもとの心になりぬへきなんいとくちをしきといひしことの(二〇四 詞書)

「身とおもひ〇たる」の「〇」の右横に「より」の書き入れ(挿入)が見られる。

無本は「身と思ひよりたる」であり、書き入れと一致する。書き入れの箇所は「どこの浦からもすまいと決心していますので、粗略に思ってお便りしないなどと、思わないでください」の意である。

「いとくちをしき」の「を」に、二点のミセケチを施し、「お」を平仮名で小さく書き入れている。書無彰刊竹架群本は「くちおしき」で書き入れと一致する。刊本も「口おしき」で書き入れと一致する。今山本の「くちをしき」は九大本と一致する。『下官集』に「おしむ」『仮名文字遣』に「おしむ おしきとも 惜」とあり、書き入れと一致する。『和字正濫鈔卷三』に「惜 をしむ 日本紀萬葉。おしむと書へからず。池にすむ名を、し鳥とつゝけたるはかなよく叶へり」とあり、今山本の表記と一致する。

集中の「くちをしき」は、一一〇の詞書、二〇四の詞書の二例である。

定家自筆本である前田家本定頼集に「くち於しけれ」がある。書き入れは定家仮名遣い系統のものを見て行ったと考えられるが、原

文書写は『和字正濫鈔』の語例と一致する。

五八才

○ふる事たにも○心身をにまかせてひとりはしりいてなんとは

(二〇四 詞書)

「ふる事たにも○心」の「○」の右横に「身をおもふやうに」を書き入れている。彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「事たにも身と思ふやうに」である。書本は「事たに」である。今山本と九大本は同じ「ふる事たにも心にまかせて」であり、意味の理解に支障はない。

○ましてたへてあるへき心ち○もせず月のあかき夜そらのけしき雲のたゝすまひ風のおとをことになしき(二〇五 詞書)

「心ち○もせず」の「○」の右横に小さく平仮名で「にイ」の書き入れ(挿入)がある。九大本は書き入れと同じ「心ちにもせず」、書本は「心地も」、刊本は「こゝちも」、竹架群本は「心ちも」であり、今山本と一致している。口語訳の場合、書き入れの「心ちにも」は不自然である。

「おとことに」の「お」は墨で消したようなミセケチで、「お」の右横に「を」を書き入れている。書無彰刊竹架群本は、書き入れと同じ「をと」である。なお、「おと」の書き入れ「をと」は二五の歌で考察し、藤原定家仮名遣い系統の写本に基づくことを述べた。『和字正濫鈔卷三』は「音 おと 萬葉におほし。をとゝ書へからす」で今山本の原文と一致する。

○をそろしき物のふともいくらもくたるなにかときけはいかなる事(二〇七 詞書)

「をそろしき物」の「を」に、鮮明な二点のミセケチを施し、「を」の右横に小さく平仮名で「お」を書き入れている。今山本と

九大本は同じ表記だが、書刊竹架群本は書き入れと同じ「おそろしき」である。

定家自筆本である御物本更級日記に「於そろし(恐)一四例」、「於そろしげ 六例」があり、書き入れ「おそろしき」と一致する。

『仮名文字遣』にも「おそろし 恐 懼 悚惶 競 威 鬼 畏」があり、書き入れと一致する。『和字正濫鈔卷三』に「恐 おそろ」がある。今山本の「をそろしき」の拠り所は見当たらない。

五九ウ

○あまりさはきし心ちのなこりにやしりし身もぬるみて心地も佐し

(二〇八 詞書)

「しりし身」の「り」に、「一線」を施し、さらに、二点のミセケチを施し、「り」の右横に平仮名で「は」を書き入れている。今山本と九大本は「しりし」、書無彰本は、書き入れと同じ「しはし」、刊竹架群本は「しりし」がない。

六〇オ

○「きかぬさ□□の世の」ほかになりもしなはや(二〇八 歌)

九大本で補うと「きかぬさきにこの世の」である。損傷はひどく判読しがたい。

○あらるへき心ちもせぬになをきたへてけふまてふるそかなしかりける(二〇九 歌)

「きへて」の「き」の右横に「たい」を書き入れ、「へ」に、二点のミセケチを施し、「へ」の右横に「え」を平仮名で小さく書き入れている。今山本と九大本は同じ、「きへて」書刊本は書き入れと同じ「たえて」、無彰本は「きえて」、竹架群本は「たへて」である。『下官集』に「消 きえ」、『仮名文字遣』に「きえて 消 霜 雪灯等也銷同」、『和字正濫鈔卷四』に「消 きえ きゆきやすとは

はたらけり。けなはけなゝんなといふは幾要切気(キエノケ)なる故に、つゝめていふなり」とある。写本異同の多い箇所である。

六〇オ

○おもひを<sup>を</sup>こして参りぬかへさに梅の花(二二〇 詞書)

「おもひを<sup>を</sup>こ」の「を<sup>を</sup>こ」に、「一線」を三回施し、「を<sup>を</sup>こ」の右横に「をお」を平仮名で小さく記入している。

九大本も「を<sup>を</sup>こして」である。彰本は「おもひをおこして」で書き入れと同じである。書本も「思をおこして」である。刊群本は「おもひおこして」、竹架本は「思おこして」でこれも写本異同の多い箇所である。

○名をいふにかき  しき心のうちに(二二〇 詞書)

空白部は破れている。九大本は「みたれかな」である。彰刊竹架群本も「みたりかな」である。

六一オ

○そのはるあさましくを<sup>を</sup>そろしくきこえしこと<sup>も</sup>ちかくみし人

(二二一 詞書)

「をそろしく」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を平仮名で小さく書き入れている。今山本と九大本は「をそろしく」、書彰刊架群本は、書き入れと同じ「おそろしく」である。二〇七の詞書で定家仮名遣い系統の写本による書き入れであることを考察した。

○第二十一番の歌から第二十四番の詞書「……とおもひいてらるゝとこそ人く<sup>い</sup>ひしか(六一葉の裏・第六二葉表)までの箇所は密着している。

○いつれか<sup>も</sup>いひなかなを<sup>を</sup>こと<sup>も</sup>おほゆを<sup>を</sup>なしこと<sup>も</sup>おもへと

(二二四 詞書)

「いつれかと」の「かと」の右横に「もイ」が書き入れている。書刊竹架群本は、書き入れと同じ「いつれもと」である。

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。書彰刊架群本は、書き入れと同じ「おなし」である。「をなし」については、六の詞書を始め、五七の詞書、八七の詞書、一四三の詞書、一九六の詞書、一九八の詞書で、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考察した。

六三ウ  
○この三位の中将きよつねの中将に<sup>と</sup>心とかくなりぬるなどさまく  
(二一六 詞書)

「中将に」の「に」に二点のミセケチを施し、「に」の右横に「と」を書き入れている。九大本も「中将と」であり、今山本の掘り所は見当たらない。訂正を意図して書き入れたと考えられる。

六四オ

○たよりにつけて  とつもきかす(二一六 詞書)

破れて不明。九大本は、不明の箇所は「ことのはひ」である。意味は、「便りにことづけて、一言も言つてよこさない」である。写本異同は見当たらない。

○心のうちをもえいひやらぬにこのゆかりのくさは(二一六 詞書)  
「えいひやらぬ」の「え」を墨で消し、「え」の右横に平仮名で「え」を書き入れている。確認のつもりで書き入れたと考える。今山本と九大本は同じ表記だが、刊本は「えいひやらぬ」である。「れ」はなくても前後の意味は理解できる箇所である。

六四ウ

○を<sup>を</sup>なし世となをおもふこそかなしけれあるかあるにもあらぬこの世に(二二七 歌)

「をなし世と」の「お」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に平仮名で「お」を書き入れている。「をなし」の書き入れについては、六の詞書を始め、五七の詞書、八七の詞書、一四三の詞書、一九六の詞書、一九八の詞書、二一四の詞書で、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考察した。

六五才

○このはらからたちの事など□□て」の「いひ」(二一八 詞書)

の箇所は破損のため判読不可能。この詞書は架蔵甲本にはない。

六六才

○心ちのわひしきとてひきかつ○ねくらしてのみそ心のまゝになき  
すぐすいかて物をもわすれんとおもへとあやにくにおもかける身  
にそひことの葉こと(二二二 詞書)

「ひきかつ○ねくらして」の「○」の右横に、平仮名で小さく「き」を書き入れ(挿入)ている。九大本は書き入れと同じ「ひきかつきねくらして」である。刊本は「ひきかつきて」、竹架群本は「引かつきて」である。

「おもかける身にそひ」の「る」に、二点のミセケチを施し、「る」の右横に平仮名で小さく「は」を書き入れている。九大本は書き入れと同じ「おもかけは」である。今山本の「おもかける」では通釈がなめらかでない。

六七才

○はかなく哀なりける契のほども我身ひとつのことにはあらずをなしゆかりのゆめみる人しるもしらぬもさすか(二二四 詞書)

「をなし」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。「をなし」については、六の詞書を始め、五七の詞書、八七の詞書、一四三の詞書、一九六の詞書、一九八の

詞書、二一四の詞書、二一七の歌で、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと考察した。

六九才

○手つからちさう六たいすみかきにかきこせなとさまく心さしはかりとふらふ人め○つゝましければうとき人にはしらせす心ひとつにいとむかなしさもなをたえかたし(二二七 詞書)

「すみかきにかきこせ」の「こせ」に、二点のミセケチを施し、「こせ」の右横に「まいらせい」と書き入れている。

九大本は、書き入れと同じ「かきまいらせ」であるが、漢字が一字はいり「かき参せ」、書本は「かきまつとなど」、無本は今山本、九大本と同じ「かきこせな」、彰竹群本は「かきまいらせなど」、刊本は「かき参らせなど」、架本は「かきまひらせなど」と、写本異同が多い箇所である。

「人め○つゝましければ」の「○」の右横に「も」を平仮名で小さく書き入れ(挿入)ている。九大本は今山本と同じ「人めつゝましければ」、無本は、今山本の書き入れと同じ「人めも」である。

「なをたえかたし」の「え」に、二点のミセケチを施し、「え」の右横に、大きく平仮名で「へ」を書き入れている。今山本と九大本は同じ「たえかたし」である。「たえ」の「え」の書き入れ「へ」の書き入れについては、二二四の歌(二)で考察し、今山本の「え」の抛り所が見当たらないことを述べた。

○すくふなるちかひたのみてうつしおくをかならずむつのみちしるへせよ(二二七 歌)

「おく」の「お」に、二点のミセケチを施し、「お」の右横に「を」を書き入れている。書無彰本は「うつしをくを」、刊竹架群本は「うつしをく」であるが、今山本と九大本は同じ「うつしおくを」

である。

複合動詞「一おく」については、「ととめおき」（二二の歌、二四一の歌）、「たのめおき」（二九の歌）、「いひおき」（二〇〇の詞書）、「かきおく」（六九の歌）で考察し、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を考慮して書き入れたと考察した。

「うつしおくを」の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「無イ」を書き入れている。今山本と九大本、書無彰本は同じ「うつしおくを」である。「を」は間投助詞で意味の理解の上で大きな異同はない。

六九ウ

○おほくてにんせうたらになくれさらぬことも（二二八 詞書）

「にん」の右横に小さく「そイ」を書き入れている。今山本と九大本の「にんせうたらに」の箇所が、彰竹架群本は、書き入れと同じ「んせうたらに」、書刊本は、書き入れと一部同じで「そむせうたらに」である。引用箇所は「たくさんあって、尊勝陀羅尼や何やかやと」の意である。

○そのおりとありしかゝりし我いひしことの（二二八 詞書）

「ありし」の「し」の右横に小さく「無イ」と書き入れている。今山本と九大本は「とありし」だが、刊本は、書き入れと同じ「とあり」である。意味は「その時ああったとかこうだった」であるから原文の方が口語訳は円滑に展開できる。

## おわりに

「書き入れ（二）」（『官崎女子短期大学紀要』第二十七号）で、二〇オの途中まで、第二十八号（二）で三七のウまで、今回は二二

七の歌まで考察した。

1 ミセケチが施されている箇所は七九である。詞書三九箇所、歌一五箇所、詞書のミセケチが多い。

二例以上の語例を挙げる。

おと（おとつれ・を含む）八例／おと七例／おく（ちきりおき・おく・いひおき・うつしおく・おきわたり・おきそふ、を含む）六例／をなし七例／あわれ（あわれ・あわれにそ・あわれに）三例・いひおこせ（かきをこし・をこし、を含む）三例／をり・をそろしく二例

2 脱字・補入等（破損を含む）は九である。ま〇しく／まとあ〇する／きられ〇し／おもひ〇たる／心ち〇せず／〇〇〇の世の／〇〇〇しき／〇〇〇とつ／〇〇て

2 ミセケチの箇所の表記が九州大学図書館蔵本と今山八幡宮所蔵本と一致するもの五九であるので共通する祖本の存在が考えられる。

3 書き入れが定家仮名遣い実例と一致するもの二九、『下官集』と一致するもの二〇、『假名文字遣』と一致するもの二七、『和字正濫鈔』と一致するもの二九であるので、書き入れの仮名遣いについては入念な検討が必要である。

4 一六六の詞書で「あわれ」の「わ」の右横に、「は」を書き入れているが、同じ詞書の終わりに「あはれなり」があり、（二）の「をふね」「おふね」同様、同一語に二通りの表記が見られた。書き入れに複数の人物がかかわっていることが考えられる。

## 主な使用文献

- 宮崎女子短期大学紀要第十六号抜刷(一九九〇)
- 井狩正司編著『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』(笠間書院 一九九七)
- 大野晋著『仮名遣と上代語』(岩波書店 一九八二)
- 福井久蔵編著『国語学大系 仮名遣一』第六卷(国書刊行会 一九八一)
- 渡辺真理子「学生レポート 今山神社蔵『建礼門院右京大夫集』について」(『解釈』二〇二号 一九七二)
- 福島直恭「定家仮名遣の社会的意義」(『国語学』一六六 武蔵野書院 一九九一)
- 柳田征司編『論集 日本語研究 中世語』(有精堂 一九八〇)
- 久松潜一 松田武夫 關根慶子 青木生子 校注『平安鎌倉私家集』(岩波書店 一九六七)
- 久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(小学館 一九九九)
- 石川泰水・谷 知子著『式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』(明治書院 二〇〇一)
- 本井田重美評註『建礼門院右京大夫集』(武蔵野書院 一九八八)
- 久曾神昇著『昭和美術館伝津守国夏筆 建礼門院右京大夫集と研究』(ひたく書房 一九八二)
- 村井順著『建礼門院右京大夫集評解』(有精堂 一九八八)
- 糸賀きみ江校注『建礼門院右京大夫集』(新潮社 一九八七)
- 草部了円著『世尊寺伊行女 右京大夫集』(笠間書院 一九七八)
- 今井卓爾監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』(勉誠社 一九九〇)
- 建礼門院右京大夫集内閣文庫所蔵本影印複製
- 建礼門院右京大夫集書陵部所蔵本影印複製
- 建礼門院右京大夫集神宮文庫所蔵本影印複製
- 建礼門院右京大夫集岡山大学図書館所蔵本影印複製
- 建礼門院右京大夫集北海道大学所蔵本影印複製
- 建礼門院右京大夫集群馬大学図書館所蔵本影印複製